

JCCA 建設コンサルタント協会  
学生懸賞論文

「あなたは“技術のプロ”になりたいですか」

**「理系になりたい！！」**

～技術者になりたい文系の選択肢～

中央大学経済学部国際経済学科

二年 荻込淳

## 第一章 なぜ私は技術者に憧れるのか

私は五歳の頃に母親の実家である北海道に、初めて足を踏み入れた。母親の実家は空知川という大きな川のそばにたっており今にも崩れてしまいそうな場所にある。事実その土地は市から危険地域に指定されており祖母がもし亡くなってしまったら市に変換しなくてはいけない場所である。そこでは、自家栽培で作物を栽培し飲料水も井戸を利用している。冬の厳寒期にはストーブの原料にいまだに石炭を使用し、家の外には薪小屋と石炭小屋がある。夜には鹿やキタキツネが畑におりてくるような場所だ。

なぜ、祖母の家がそのような場所にあるのかということ、まだ街の概要もできていなかった炭鉱町であった頃祖父が炭鉱夫として石炭を掘る技術者として移り住み、土地を開拓したためである。そのため、町の中にはいまだに炭鉱住宅が立ち並んでいる。私の住まいはというと関東の都市近郊にある。いわゆるベッドタウンといわれる地域に住んでいる。飲料水は水道局からの水を使い、冬には石油ストーブやエアコンを使って暖を取っている。そうであるから、当時市街地に住んでいると思い込んでいたので、祖母の家に初めて行った時にはその環境に驚きと大きな好奇心を覚えたことは、今でも忘れることはできない。

祖母の家では半自給自足の生活を体験した。例えば、自家栽培の作物の収穫などである。何をするにも自然が隣りあわせで、自分で物事を作り出しえるということが当たり前の生活であった。

この経験が私の技術者への憧れの気持ちを抱かせた原点であると思う。この経験をきっかけとして、私はモノづくりの楽しさにどんどん飲み込まれていった。

ものづくりの楽しさを覚えるにつれて、日曜日や祝日の日に、近所で家を新築しているところを見つけると釘や廃材をもらい家に帰って工具を持ち出し本棚や、いすを面白がって作るなどをするようになった。

小学校にあがり図工や家庭科などを習うようになった。私は、勉強ができない方ではなかったが、図工、家庭科などの実技科目は他の教科よりも興味が一段とあったため、いつも一番いい成績をとっていたことを今でも覚えている。高校生にあがると自動車に興味を持つようになり、大学入学後自分で自動車を購入した。自動車整備士の友人の影響でもあるが、整備の教科書を借り独学で車の知識を勉強し、大学の勉強そっちのけで自動車整備に没頭している。ひとつ部品を改造すると効果が出ることに快感を覚え、次はこの部品を交換しようその次はあれを交換しようと思欲がわいてくる。次第に私は自動車のもっと細かな構造を知りたいと思うようになってきた。

そうやって、自分の好きなことに興味をもって勉強していくうちに、私は高校の頃に後悔した理系の職業に対する思いが一段と大きくなっていった。私の場合、その対象が自動車に向いていったわけであるが。自分で自動車の設計をしてみたい。自分で車の整備をできるようにになりたい。と真剣に思うようになったのである。

モノを作るということに魅力を感じ、完成させた喜びを肌で感じたい。そのような衝動が日に日に強くなってきていることを強く実感している。ひとつのことに情熱を持って取り組むという楽しさを自分の中でも大切にしたい、私は経済学部の学生になってから、そのような気持ちをさらに強く思うようになった。

### **私の考える技術者とは**

技術者とは、いったい、なんであろうか。

目に見える東京タワーや、六本木ヒルズ、巨大ダム建設。

確かに、世間一般のイメージとして「技術者」というものはプロジェクトXのように巨大な橋や建造物を作ったり、巨大貨物船を建造したり、またはコンピューターのプログラミングをしたりする人たちが「技術者」であるというものがあると思う。

しかし、私の中では技術者というものはそのように印象深いことをしている人たちだけが「技術者」であるとは思っていない。これは当たり前のことであると思う。

だが、極端になってしまうかもしれないが私なりに技術者というものには広いイメージを持っている。それは「手に職をつけた人達」である。

例えば、大工であったり、小さな部品を作る町工場の人達、更にはこけしを作ったり、飴細工を作ったり、はたまた自然を守る為に自然と共存できるように環境を整えるレンジャー。このような一見地味で強い印象を普段感じないことも私の中では「技術者」であると思う。

つまり、建築物、電化製品、自然環境保護員であれ、モノはなんであれ、何かを生み出すことを自分の職業としている人達である。それは極端に言う私の中では文系の職業ではないものが技術者であるのと思っているということかもしれない。

何か形のあるものを作るということだけでなく、何かを生み出すということ。それを自分でできる人達が私の中では「技術者」であると強く感じるのである。

## **第二章 文系から見る理系の職業**

前段落で技術者というものの私の感じるイメージを説明したが、実際理系の技術者というものはどのようなものなのだろうか。

日本は現在最先端技術国家と呼ばれるほどに、技術力に豊富な知識を持ち、大きな自信を培ってきた。現代の日本国の発展はここに由来しているといっても過言ではない。

だが、実のところ技術者というものは日本経済においてはあまりちやほやされることはない。

事実日本において近年理系離れということが叫ばれてきている。それによるところは、経営について言えば文系の事務的業務が会社の中核を占めているのが現状である。経営の舞台では文系が製品を世に送り出す。理系は裏方となって世に送り

出すべく製品を開発・製作している。職種にもよるがもちろん販売側、製作者側がいないと経営は成り立たないということはいうまでもない。企業というものはそうして文系と理系の大まかに区別された二つの要素が相互に絡み合い、そして相乗効果を持って大きな力を持った製品を生み出すことができる。

文系出身による経営が大部分を占める日本の経済において、理系の職に対する待遇は文系に比べるとあまりいいものではないようだ。その理由のひとつとして文系、理系について資格を持つことで技術者と呼べるのかということだ。技術者というものは資格によって名乗ることができるものの中にはあるが、範囲が漠然としているのでどこからが境界線かは自分の思う限りである。そのような漠然としているところにおいても待遇が難しいところであるのだと思う。もちろんそれは私的な意見の極端なものとなってしまうが、近年理系の枠を有力な資格、例えば情報処理技術の資格等で位置づける動きが活発であるということはいうまでもない。

しかし、現代の日本の経済が成り立っていることは紛れもなく技術者たちの功績があってこそその経済発展である。日本が最先端の技術国家といわれる所以はそこにあることだろう。

よって、これまでのような待遇を改善し、もっと広くから技術者を受け入れられるようにすることは、文系の人達からしても選択の余地が広がる一つの材料となるのではないかと思う。ないものねだりで私が思うことであるのかもしれないが、待遇を求めるのではなく自分の体から湧いてくる情熱を自分の思っているように、一生懸命になってその仕事に打ち込めるような理系の仕事にはとても魅力を感じる。私は、そのような仕事に興味を持っているのでやりがいがありそうだと憧れているのである。

技術というものは大まかに言うと技術 生産・開発である。  
現代の日本国における技術力というものは様々な分野の技術の集まりで成り立っている。例えばコピー機メーカーの CANON の製品について考えてみる。  
コピー機と一口で言ってみてもコピーをする為には様々な分野が複合的に集まっている。字を印刷する為のインクの化学的分野、機械設計、電子機器作成の為のエレクトロニクス分野、様々な分野の技術が集まり、そしてそれらが互いに複合しあってひとつの製品が生まれる。

技術製品の世の中への流れは私の私見ではあるが、おおまかに考えてみると製品製作(もちろん複合的にからだ技術分野を含む)を理系、世に出された製品を利用するのが文系と考える。これまでの技術力の製品製作から使用までの流れは一般人が手の届かない高度な理系の分野から一般人にモノが流れてくるという印象であった。

だが、現代の製品開発は今までは底辺に位置した利用者からの要望、意見、批評を反映して改善・開発が行われるようになってきた。それは、おそらく開発元に一般ユーザーの声がより届きやすい環境になってきたということであろう。それによって技術者から製作者へ、製作者から利用者へ、利用者から技術者へと流れるフィードバックが起こり、さら

に新たな性質を持った製品を生み出せるようになってきた。

こうして、ある種、利用者が製品開発アイデアのプロと化しているのだ。現在においてこのフィードバックというものは技術発達の為には欠かせないものとなっているのはいうまでもない。

このように、製作のプロの製品を利用者のプロが使用する。それは、ある意味実験を利用者に課しているようなもので、世の中が実験社会となっている。

日々の生活において、機械製品を必需品として使用している現代では一般の日常がテクノロジー社会となっている。この状況の中で作る技術者に加えて、益々使う技術者というもの存在が大きくなっている。日本の現状において、世の中がみな技術者化してきていることがいえるのではないだろうか。

#### **第四章 理系の技術者がイキイキと輝ける舞台を支えるアシスト技術者のプロ**

私は昔から、そして今も技術者になりたいと思っている。しかし、今勉強しているのは、技術とは直接関係のない経済学である。

小学校、中学校と私は数学がとて苦手で、数学に対するコンプレックスを克服することができなかった。そのようなコンプレックスを抱いたまま私は高等学校に進学したのであるが、高校生ともなると自分の将来やりたいことを少しずつ意識し始めるもので、私は前述したとおり幼い頃からものづくりに対して大きな憧れを抱いていたので、できることなら将来は理系の道に進み、自動車を作ったり、あるいは自然環境保護員になったりなどという希望を持っていた。

しかし、私の進学した高校では一年の一学期の終わりには二年次からの理系か文系かのコースを選択しなければならなかった。当初、私はもちろん将来のことを考えると理系のコースにしようと考えていた。

だが、選択の 때가 近づくとつれ、自分が理系に行きたいと望む気持ちに反して、数学が苦手であるという気持ちが次第に強くなっていった。現代の技術はすべて数学を基礎としていると一般的に思われており、私も高校時代はそう思い込んでいた。文系と理系というものが現代の教育方法又は教育方針により完全に数学を学習するかどうかで分けられてしまっているのであろう。今だから言えることであるがその時の私の希望は文系と理系の間を中途半端にさまよっていた。最後まで選択肢を迷っていたのだが、結局数学が苦手というコンプレックスに負け、希望に反して文系の道に進んでしまった。

人間は無いのねだりであるというのが、私は自分の決断にとて後悔を覚えた。もちろん今でもその後悔は強く感じている。それは、今文系に進み将来のことを現実的に考えるようになった状況にいるからこそ、自分が選択したことに対して後悔をしていることをはっきりと感じているのだ。

それは私の意志薄弱なものによる選択の過ちが言い訳を言っているということに過ぎな

いのであるが、やはり人生を変える出来事であったということでも残念である。

現在、日本は、世界の中でも最先端の技術を持っている。日本の技術力は世界列強国の中でも秀でた能力である。

実際、日本製品の評価は先進国の中でも極めて高い。電化製品ではSONYやCANON等が世界で活躍をし、自動車業界ではTOYOTA、NISSAN、HONDAが一大ブランドとして高い評価を受けている。TOYOTA自動車に関しては世界一のシェアを誇ってきたゼネラルモーターをいまや追い抜こうとしている。

戦後経済復興の際に培ってきた世界に対抗しようというところの日本の技術力は、いまや戦後の頃とは比較にならないほど成長した。また、近年では外国資本との提携なども活発に行われており、益々の成長が期待できる。

だが、その裏では表舞台を輝かせるために主だった企業を支える中小企業の存在があり、日本の技術力の成長のために大きな成果を残してきた。日本にはそうした地盤を支える技術者たちがたくさんいたのである。

しかし、近年日本経済の長期低迷のあおりを受け、今、それらのいわゆる大企業を支えてきた中小企業の経営が圧迫され、次々に倒産が増加している。そうして裏舞台で活躍をしている企業が消滅することで、貴重な存在である技術力を持った人材が減少して行く。

また、近年の伝統工芸への若者の職離れもあり、伝統技術の伝承ができないという問題なども深刻となっている。さらに、裏舞台であるためにそういった技術を世間に知られることがなくなるなどして、新しい人材の育成が難しくなり、いわゆる手工業のプロは益々数を減少している。

技術者の養成は、日本の今後の経済のために、より一層重要な課題であることはいうまでもない。

私は現在大学二年生であり、来年には就職活動が控えている。自分のやりたいことを考えた際やはり、メーカーの製作部門にはとても憧れを感じている。

しかし、文系に進んだ私にとって製作部門や設計部門は目指すことはもはや難しい職業である。

私は難しいとは分かっていても、やはりプロジェクトXのように自分でモノを作り上げたときの感動を、肌で味わいたいと心から思う。第三章で前述したように、製品を開発し、世に送り出す技術者のプロもいれば、その製品を利用し利用者のプロとして開発に間接的に携わるものもある。いや、現代の開発においては直接的に関わっているといっても過言ではないだろう。このように、技術というものによって生まれるひとつのモノは製作する理系の人々だけではまちがいに輝きを持って世の中に広がっていくものではない。

だからこそ、私は、そのような自分の立場と、技術者の厳しい現状を踏まえた上でも、理系の技術者とは違う道なのであるが、目標を持ってひとつのことに情熱をもって挑み、完成させた喜び、感動を理系の技術者とともに味わいたい。

さらに、経営に携わることができる文系として、前述したことはあるが、理系の技術

者が自分の技術を公に正しく評価されるように、また、技術者の現状が厳しいということ  
を背景としても、理系の技術者が興味を持たれ、技術者になろうという若者が現れてくれ  
るようなアピールができることも視野に入れ、文系としてアシストができることを大きな  
野望として心に抱いている。

また、たとえ、理系の製作・開発をする技術者になれないとしても、文系の利用技術者  
のプロとして、最大限に開発・製作にプラスになるものを生み、さらにそれを製品にでき  
る限り反映させることができるように、表舞台を支える裏舞台のアシスタントの技術者の  
プロとしてできる限り技術者に携わり、理系の技術者とともに複合的な技術のひとつの分  
野としても、完成させた喜びを感じることができるとな職業を目指したいと思う。

それが、私の今の強い気持ちであり、自分にとって最善の選択肢であると思っている。